

---

# アクロ・キューブ

雨時時雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクロ・キューブ

### 【Nコード】

N9315S

### 【作者名】

雨時時雨

### 【あらすじ】

白髪美少女のアクロ。

ナイフを全身に仕込み、愉快な仲間と共に世界を旅する！

そして、アクロの正体とは・・・

## 1 偽善者の国（前書き）

「アクロってさあ、なんでそんなに、運動神経いいわけ？」  
幼さの残る少年の声が、アクロと言う少女に、問いかけた。  
少年の声は、透き通ったボーイアルトだった。  
それを例えるならば。

晴れ渡った、雲一つない空の、青の様な声。

「それはね、シエン、そう成らざるを得なかったからだよ」  
アクロと呼ばれた少女は抑揚なく、シエンと言う少年にそう答えた。  
鈴鳴るような声は感情が無かった。

それは、例えるならば。

カップの中の、冷めてしまった紅茶の様な声。

「なんだよそれ」シエンは不思議そうにアクロに言った。

「何なんだろうね、ボクにもよく、分からない」

アクロは曖昧にそう言った。

## 1 偽善者の国

果てしない荒野に、野太いエンジン音が響く。

乾いた大地に、焼け付く日差しが落ちている。

ワインレッドに塗りつぶされたオープンカーには、四人の、人間が乗っていた。

男2人に、女2人。

「アクロちゃん、何処まで行くんですう？」

金髪の美女は、助手席に座っている、老婆のような白髪を持つ少女に問いかけた。

アクロ・キューブは貪る様に食べていたクッキーの缶から目を離さず、美女に言った。

「後もう少しですよ、ベルガモットさん」

「タメ口でいいって言ってるんですよ？」

美しい金髪を揺らし、<sup>すみれ</sup>菫色の瞳を輝かせながら、ジャスミン・ベルガモットはそう言った。

アクロは『寒くなってきた』と言いながらコートを首元まで留め、またクッキーに目を戻した。

ジャスミンは楽しそうだ。

「何が目印なんだ？」

後部席の少年が、目の前のアクロに身を乗り出し、問いかけた。

「でっかい檻<sup>おり</sup>だった」

アクロはクッキーを口の中で、もごもごさせながら言った。

「檻？」

「うん、檻、黒い檻なんだって、一種の国らしいけど、シエンは楽しみ？」

墨<sup>すみ</sup>のような黒髪に、空を映した海のような青色の瞳を持つ少年、シエンは首を傾げた。

シエンの過去には、いろんな事情があったため、苗字は無い。

「楽しみかはわかんねえよ、行ってみねえことにはさ」

「ボクは楽しみだよ？君見たいな、お馬鹿さんとは違ってさ」

「っんだと！」

シエンが瞳をギラつかせた時、隣にいた大柄な男がシエンの肩を握った。

「やめろ、シエン、嬢ちゃんには適わねえって」

「うるせえ！放せよハイド！」

褐色の肌に、若葉の様な色の瞳に、独特の黄緑色をした、短かい髪の大男、ハイド・アクソンは、かははと乾いた笑をこぼし、シエンの首元を猫の様に持ち上げ、席にきちんと座らせてから、手を離れた。

シエンは眉間に皺を寄せ、音を立てながら激しく貧乏揺すりを始めた。

「底が抜けるからやめてよ、シエン」

「黙れえっ！」

アクロの物言いに、苛立たしげに叫んだシエンは、貧乏揺すりを一層激しくさせた、その時。

「あっ！あれ、檻って？」

「えっ？」「はっ？」

ジャスミンは、片手でハンドルを握りながら反対の手で前方を指差した。

そこには巨大な黒い檻、檻の中には大きな建造物が並んでいる。

「建物、建ってるんですね」

「人間が動物みたいですなえ」

「超でけえ〜」

「かはは、牢獄みたいだな」

それぞれの感想を口にし、黒い檻の入り口に車をつけた。

「「ようこそ、旅人さま御一行殿」」

入口の両脇に大きな獣。

左側に巨大な鷲が、右側に巨大な鷹が、人語で話しかけてきた。

「・・・・・・」

4人は呆氣にとられ、ぽかんと口を開けていると。

「おっと、失礼いたしました、私達の国の動物、獣は人語が話せる者も居ます、私達は門番でございます。」

鷹の方が4人に向かって話しかけた。

「・・・・へえ、そうなんですか」

アクロはクッキーの缶をコートの中に仕舞うと、車を降りた。

「あの、車は・・・」

「入国しても、使用していただいてかまいません、ですが、銃やナイフの所持は許可しておりません」

鷺がそう言った。

「そうですね、じゃあ、シエン、ハイドさん、ベルガモットさんも降りてください。」

ジャスミンとハイドは返事をしながら、車を降りた。

シエンはまだむすくれたままだったが、無言でゆつくりと車から降りた。

アクロはコートの内側を探り、三本のナイフを取り出して、鷺の方に渡した。

鷺は丁寧<sup>ていねい</sup>にナイフを受け取った。

「ナイフは出国の際にお返しいたしますゆえ。ご安心ください。」

「そうですね、分かりました。」

アクロは抑揚無くそう言った。

## 1 偽善者の国（後書き）

一気に投稿しますよぉ～  
W  
W

## 2 紅い願い

ブoooooooooooooooooooo。

オープンカーのエンジン音が、激しく響いた。

アクロは白髪を隠すため、赤い大きなコートに付いている、フードをすっぽりと被っていた、白髪を見ると道行く人々が、奇異きいの視線を向けてくるので、気分が悪いのだとアクロは言う。

途中何人もの人間に、食事やお茶に誘われたが、アクロは全て断っていた。

アクロはガリガリとペロペロキャンディーをかみ砕いていた。

そこへ。

「あの、旅人さん」

と、長い赤毛を一つに結った、病弱そうな女性が、アクロに気弱そうな顔を向けて、そう言った。

「旅人さん、一緒にお食事しながら、お話しさせてくれませんか？」  
女性は必死な形相でそう、アクロに問いかけた。

「……………いいですよ……………」

アクロは無愛想むあいそうに了承りょうしょうした。

「いいのかよ、さっきまでのさんざん断つという  
シエンはアクロに言った。

「いいんだよ……貴女はボクに頼みたいことがあるんでしょう？」  
アクロは女性に言った。

女性は目を真ん丸くして驚いたが嬉しそうな顔をした。

「はい、そうなんです、あまり大きな声では言えないんですが……」

「だから、食事に誘ったって訳ですか」

「ええ、そうなんです」

女性はコクコク頷いた。

\*

\*



アクロは赤いカーペットの敷かれた、ホテルの一室に、ジャスミンと、あの女性と居た。

ハイドとシェンは別室で食事を楽しんでいた。

アクロ達の居る部屋にはテーブルクロスクロスの敷かれたテーブルの上には沢山の豪華な料理が並んでいた。

アクロはフードをすっぽりと被ったまま、分厚い肉を、上品に小さく切って食べていた、ジャスミンはワインを飲んでいる。

「好きなだけ食べてください」と女性に言われてから、今までずっと食べ続けている。

あれだけクッキーやらペロペロキャンディーを食べたのに、まだ食べている。

「アクロちゃん、それ位にしといたほうがいいですよ、太るですよぉ？」

ジャスミンが嗜たしなめると、アクロは露骨ろこつに残念そうな顔をしてから。

「デザートがまだだよ？」

と、言った。

アクロの前に座っている女性は楽しそうにフツと笑うと、近くにあった電話で、デザートのルームサービスを取った。

「デザートを食べながら、お話しいたしましょ、その前に、貴方達の中に『紅蓮龍』ぐれんりゅうと言う肩書きを持つものはいらつしゃいますか？」

「・・・『紅蓮龍』はボクですよ・・・ゼニアさん」

彼女はゼニアと名乗った。

ゼニアは運ばれてきたケーキやムースをアクロとジャスミンの前に運ばせ、自分は小さなタルトにフォークを刺した。

ゼニアは、アクロが『紅蓮龍』だと知ると、とても驚いた風だったが、淡々（たんたん）と続けた。

アクロは目の前のショートケーキの苺を突き刺し、口に運んだ。

甘酸っぱい、なんとも言えない味が口いっぱいに広がる。

「率直に言わせていただきますと、この国の王、つまり統率者である人物にあることをお願いして欲しいんです。」

ゼニアはタイミングを見計らい、話し始めた。

「実はこの前、私の夫が、重い病にかかってしまつて。」

「そうですか・・・」

「はい、それで、夫の病気を治すには、娘の・・・娘の臓器を使わなければならないんです。」

「どうしてですか？」

「血縁者の臓器の方が、体に負担がかからないそうなんです。でも、他の人の臓器が、一致する可能性があるんです！なのに・・・、娘をとるか、夫を取るかの選択を、迫られているんです。ですから、王に他人の臓器でも、了承が得られれば、その臓器を使用してもいいという法律を、作っていただきたいと頼んで欲しいんです。」

ゼニアは目尻に涙を溜めながら、俯いた。

暗い沈黙は少し続き、そして。

「・・・なるほど、では、その依頼、承りましょう。代償は高いですよ」

「なんでも用意いたしますわ」

「・・・綺麗なナイフと、携帯できるような甘味、あと、ガソリンを用意してください。それと、依頼を終了させるまでのホテル代、食事代などの支払いも、お願いしたい。」

「それくらいでしたら、全然大丈夫ですわ、夫も娘も助かる可能性が増えるんですから、それくらい安いものですわ！よろしく願いいたします。」

ゼニアは深々と頭を下げ、部屋から出て行った。ドアの向こう側。ゼニアの顔には黒い笑顔があつた。

「完璧な演技ができましたわ・・・お父様・・・」

### 3 紅色の過去

「で、どうすんだよ」シエンが億劫そうに言った。

「どうするって、ですう、アクロちゃん」

ジャスミンはアクロの方を楽しそうに見ている。

「はあ、じゃあ、ジャスミンさんは王宮で近々あるイベントがないか調べて、あれば招待状を奪ってきてください。シエンはボクと一緒に行動するか、ここで待ってる事、ハイドはシエンと同じ。」

「はいですう」

ハイドはシニカルに笑いながらベッドに胡坐をかいて座ったまま言った。シエンは不服そうだったが何も言わなかった。

「じゃあ行って来るですよ？アクロちゃん」

「はい、お願いします、8時にまたここに集合で。」

「はいはいですう」

ジャスミンは、鼻歌でも歌いだしそんな雰囲気、かもし出しながら、後ろ手に片手を振りながら、出て行った。

「さあてと、ボクはこれから、買い物に行くんだけど、どうする？」

アクロは部屋から出ようとしながらハイドとシエンの方を振り向いた。

「行く！」

シエンは眉根の皺を深くしながら身を乗り出して言った。

「待つとくぜ、かはは」

ハイドは言って、ごろりとベッドに倒れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アクロはそのまま部屋を出て行った。シエンが後ろをついていく。檻の外から見える月は青く燃えているようだった。

暗い、青の闇が空を覆っていく。

フードの隙間から零れる、白い髪と白い肌が闇に映えた。

白い髪からは甘いシャンプーの匂いが漂う。

「あのさ、どうしてお前の髪って白いわけ？生れ付き？つか、アルビノ？」

シエンは不思議そうに聞いた。

「・・・生れ付きじゃないよ、元は赤毛だったんだ。」

シエンは燃えるような赤毛を纏<sup>まと</sup>ったアクロを想像した。

火の女神のようだった。サラマNDER。

「じゃあ、どうして？」

シエンは聞いた。白い髪と違い、黒い髪は闇に消えた。

「どうして・・・答えようと思えば答えられるかな・・・それはね、ひどいストレスと憎しみで脱色<sup>だつしやく</sup>してしまったんだよ。」

「お前が何かを憎むなんて珍しいな」

「そうかな」

「そつうだよ」

「・・・まあ、ボクにも両親ってもんが居るからね、ちよつとしたいざこざがあつたんだよ」

「いざこざねえ」

「そつ、いざこざ、いざこざ、その憎しみを晴らすために旅をしてるんだけどね」

「憎しみを晴らす？」

「復讐<sup>ふくしゅう</sup>って感じだよ」

「復讐<sup>ふくしゅう</sup>かあ、でもよ、誰に復讐<sup>ふくしゅう</sup>すんだ？」

「父だよ」

「親父かよ、なんでだよ」

「これ以上は教えられないよ、今日はちよつと喋り過ぎたかな。」

「なんだよそれ・・・何時かは教えるよ？オレ等の存在を許せよ」

「・・・？ボクが君の存在を許してないって言うの？」

「許してねえだろ、分かり合うことは、許し合う事だ、お前は何も分からせてくれねえから、オレもお前に分かってもらおうと思えねえ、てこつた」

「意味はよく分らないけど・・・悪かったよ、何時か話すから、今

はその時じゃないんだ。」

「おう、何時でもいいぜ、待っててやるよ」

シエンは満面の笑みを、浮かべて言った。

「………ありがとう」

アクロは照れくさそうにして、コートのフードを深く被った。

フードの影から見えたアクロの表情は、年相応としそうの照れた笑顔だった。

「……へへへ」

シエンは楽しそうに笑う。

「ちょっと、小耳に挟んだんだけど、ここら辺に良いお店あるんだって」

「へえ、探すか」

「もちろん」

アクロとシエンが並んで歩く。

闇に溶けた黒が、消えることの無い白を包んだ。

### 3 紅色の過去（後書き）

へい！まだまだ続くぜww

#### 4 紅い剣と蒼い爪

「ここか？」

「たぶん・・・」

アクロ達の目の前には、怪しい雰囲気の店が一つ。

ここは路地裏ろじうらを行ったり来たりした末にたどり着いた店。

「入ってみるか」「うつ、うん・・・」

アクロはビクビクしながら、シエンのシャツの裾すそをつまんだ。

「なんだよ、怖いのかよ」

「こつ、怖い分けないだろお、ぜんっぜん平気だよ。」

アクロはぶるぶると震えふるながら言った、声が裏返うらがえっている。

「はっ、しゃあねえなあ、シツカリ掴つかまっつけよ」

シエンは前髪をかき上げながら、アクロの手を取った。

アクロは手を振り払おうとしたが、力が強く離せなかった。

「放せ」と言おうとしたがシエンがずんずんと言ってしまったため、言えなかった。

「すみませ〜ん！」

シエンが、店の人を呼び出そうと、声を張り上げた。

「くつくつくつく、そんなに大声を出さなくても聞こえてるよオ、お譲じやうちゃんとお坊ぼっちゃん」

と、仄暗い店の奥から、語尾が高くなるような声が聞こえてきた。  
ぬつと目の前に現れたのは、紫色の髪を背中に下ろした、喪服もふくの様な服装の男。

「くつくつくつく、来るのも分かってたしィ、来たのも分かってたア、待ってたよオ」

言つと、男は厭らしい（いや）笑みを浮かべた。

「あの、ここ、ナイフを売ってるって聞いたんですけど・・・」

アクロはビクビクと震えながら男に聞いた。

「くつくつ、ああアア、誰に聞いたんだいィ？まあいいやア、ちや

んと、君のためにとって置いたんだよオ？」

と言いながら男は、店の奥に行き、少しして戻って来た。

「くつくつ、これこれエ、《血染ノ劔》ブラッディ・レイベンってやつらしいんだア、くつくつくつ。」

男は細長い箱をアクロに差し出した。

「んでエ、これがア、君のだよオ・・・何て言っかなア、えつとオ《青い爪》？」

「ネーミングセンスがひでえよ!!」

シエンは叫んだ。

「嘘だよオ、《聖海ノ爪》マリンエッジだよオ？」

男はうざったくシエンに言った。

「あ、あの、これいくらですか？」

アクロはたじたと聞いた。

「くつくつくつ、あげるよお、君たちのために取っておいたんだア、勝手に持って行きなア、後オ、これもあげるよオ」

男は、深紅しんくのフワフワとした服を、アクロに手渡した。

「これは？」

「あとあと必要になると思うからねエ、それもあげるよオ」  
言うが早いか、男は店の奥にまた戻ってしまった。

「・・・・・・帰るか。」

「・・・・・・うん。」

アクロ達はその場を立ち去った。



#### 4 紅い剣と蒼い爪（後書き）

つづ  
づ  
く  
う  
ゝ  
w  
w

## 5 紅いドレス

ホテルに着くと、二人は同時にボスツツと、ベッドに倒れこんだ。ハイドはソファで寝こけていた。二人はごろごろしながら、あの男に渡されたものを眺めた。

アクロに渡された細長い箱の中からは、黒じやないかと思うほど深い深紅の、フェンシングで使うような刀身の細い剣。レイピア。

バラの象られた鍔の部分も深い深紅だった。

シエンに渡された、小さな四角い箱からは、タンザナイトと言う寶石を削って造られた、透き通るような薄い青色の鉤爪が二つ。エッジ。

鋭くとがった爪の先が青い光を放っていた。

「おつ、結構得意なタイプの武器だ」

シエンは嬉しそうに言った。

「物を投げて攻撃かぁ、野生だね」

「うつせえ、お前の何だよ」

「レイピアだよ、細い刀身の剣、主に突く攻撃、斬る事も出来るんだ。」

「お前が欲しかったのって、短剣、ナイフだろ？良いのかよ、そんなんで。」

「うん、まあ、追い返されるような形だったし、この国ではこれだけでいいよ。あつ、でも、依頼完了のお礼にナイフを頼んだから、それを楽しみにしとくよ」

「ふう〜ん」

「たっただいまぁ、ですう！」

ジャスミンが、能天気な声を出しながら帰って来た。

現在、えいと・おくろ〜つく

「どうでした？」

「ふっふう〜ん 王宮で、明日、舞踏会があるらしいんですよ、

参加は自由らしいですう、だから招待状はなあゝし！」

「そうですか、分かりました、ありがとうございます。」

「いいえ、どうってことないですよお、て言うか、本職だし、情報・収・集」

「本職って？」

シエンは不思議そうに聞いた。

「情報屋ですう」

ジャスミンは蠱惑的に微笑んだ。

「情報屋って？」

「情報を売る仕事だよ、お・馬・鹿・さん」

アクロが茶化す様に言った。

シエンは拳をつくって、振り上げるだけに留まった。

「おやや？アクロちゃん、それなにですう？」

ジャスミンは興味津々に、床に落ちている、男に渡された、服を眺めた。

「もしかして、アクロちゃんも、お洒落に目覚めたので「んなわけない！」・・・、ですよねえ」

アクロは台詞の途中に慌てて言った、ジャスミンはがっかりしたように言ったが、服を拾い上げた。

「わぁゝ、モスリンたっぷり！可愛いそうですう？アクロちゃんに、とっても似合うですよお！！」

ジャスミンはウットリとアクロと服を見ながらクルクルと回っていた。

「・・・嫌な予感がする・・・」

アクロはそう呟いた。

## 5 紅いドレス（後書き）

まだまだ行くぜえ  
W W

## 6 紅ワイン

なつ、何でボクはこんな格好をシテイルンデショウカ・・・」

「なんで、最後カタカナ発音なんですか、ふふくん、舞踏会に出席して、統率者さんに頼み事するんですよえ？ 潜り込まなきゃですよあー」

ジャスミンは楽しそうに言った。

今はもう、舞踏会の始まる夜。

アクロはあの男に渡された服、モスリンたっぷりのミニドレスを着ていた。

腰の部分に巻かれている、大きな白いリボンの中に、ナイフが2本ずつ収納されていた。

白いレースに、深紅の生地、小さな深紅のシルクハットには白い大きなリボンが巻かれていた。

真っ白な髪はツインテールにされていて、首元が寒いとぼやいていた。

いつもの、シャツに短パン、コートのアクロからは想像もつかない姿である。

ジャスミンはと言うと、瞳と同じ董色のカクテルドレスを身にまとっていた。綺麗な金髪に、董色のリボンを編みこんだ、凝った三つ編みを一つのお団子状にしていた。

シエンはタキシード姿で、アクロに「緩んでる」と言われ、きつく結ばれたネクタイに苦しんでいた、前髪の右側を沢山のピンで留めていて、青い瞳がより大きく見えた。

ハイドは、綺麗なカッターシャツと黒いズボンだけだった。一言、行かないと言われてしまったため、それ以上のことはできない。

ハイドは人間的にはありえないほどの怪力で、ドアノブを回そうとすれば、握りつぶし、コップを持とうとすれば、粉碎してしまうほどの力を持っているため、必要以上にあれこれ押し付けることはで

きないのだ。

「ええつとですねえ、刃物や銃器の持ち込み禁止、動物などのご入場は禁止・・・だそうですね？どうするんですう？」

「大丈夫ですよ、このレイピア、ドレスの中に隠せるし、ナイフも4本持ってます、料理も振る舞われるんでしょう？だったら、ナイフやフォークは絶対出るはずでしょ？」

「確かにそうですね、絶対大丈夫ですね！」

ジャスミンは長い睫を伏せ、ウインクをした。

アクロは血染めの剣の入っていた箱の中から、皮製の鞘を見つけ、ドレスの中に隠れるように、太腿に取り付けた。

「分かんないですう、大丈夫ですう！」

ジャスミンは言った。

シエンは腰のベルトに聖海ノ鉤爪を飾りのように、お洒落に取り付けた。

「大丈夫ですよ！アクセサリーにしか見えないですう」

ジャスミンは茶目っ気たっぷりにもたウインクをした。

## 6 紅ワイン（後書き）

いくよお  
w  
w

## 7 紅い旋律

美しいワルツの旋律が流れる。

まっ白な大理石の床に、素敵なシャンデリアが光を、あちらこちらに反射させていた。

アクロたちは、舞踏会の会場に入る前に、二人の兵隊に会った、金髪のは物腰柔らかにお辞儀をした。参加者名簿の紙で指を切ったようだが、本人は気にしていないようだった。

シエンは血の匂いにぴくりと反応を示したが、平常心を装っていた。赤毛の兵隊は、アクロ達の胸元に紅い薔薇の花を挿した。

会場に入ると、ザワザワとアクロに沢山の視線が集まる。

その視線はアクロに、『奇異』の感情を向けていた。

白髪の少女。

なかなか居るものではない。一部の男性陣からの視線に、アクロは気持ち悪そうに背を向けた。

シエンが、何か行動をとるたびに、黄色い悲鳴が上がった、シエンの顔立ちは、どこぞの貴族にでも見えるんじゃないかと言うほど整っている。シエンは色んな女性に踊らないかと誘われたが、ジャスミンがシエンに教えた魔法の言葉。

『連れがいたので、  
で、全て断った。』

けしてアクロの顔立ちが整っていないわけではない、白髪の方が酷く目を引き、顔立ちなど目に入らないだけであって、アクロの顔立ちはどこぞのご令嬢にも負けない美しさだった。

筋の通った鼻、真っ白な肌に桃色の頬、薔薇色の唇、整った眉、美しい曲線を描く輪郭。

ただ、澱み沈んだ赤い瞳のせいで雰囲気は高貴なものでは無く陰気なものになっていた。

アクロのこの容姿とあのひねくれた性格に惹かれるものは結構いる



もので、ジャスミンはその一人である。

白いテーブルクロスの掛けられた、長テーブルの上に並ぶご馳走達、だがナイフやフォークは無く、三又スプーンだけだった。

「凶器の制限が徹底されていますね・・・」

アクロはジャスミンに耳打ちした。

自分達の持つ武器は、レイピアと爪にナイフが4本だけ。

バラの形をしたチョコレートを生クリームと共に、三又スプーンでつついていた。アクロの口元には生クリームが付いている。

「アクロちゃん、言葉遣いに気をつけてですう」

ジャスミンは、ハンカチで生クリームを拭い取りながら言った。

「分かってますよ、ジャスミンさん」

コクンと大きく頷くと、お皿をジャスミンに渡し、シェンの方へ小走りに向かった。

そして、

「ごめんなさい、待ちまして？」

と、いつものアクロからはありえない、猫撫で声で言った。

シェンは首筋に鳥肌が立つのが分かった。掌に掻いた汗をズボンで拭い、アクロに手を差し出し、跪いた。

「いつ、いいや、待ってないよ、踊ろうか・・・」

「はい」

シェンはジャスミンに言われたとおりに言った。アクロは猫被った笑顔だった。

シェンの周りを集っていた女達からは、悲鳴のような声が上がる。

アクロにはそんなもの全く関係なかった。

あの男性陣から残念そうな声が漏れたが、その後は、感嘆の音が響いた。

黒と白のコントラスト。赤と青の瞳の中に渦巻く光ライト

アクロの赤い瞳がチラリと見た先には、長い金髪を一つに結った、豪華な服装の若い男が一人、統率者だ。

シェンはアクロの細い腰に手を回し、アクロはシェンの背中に手を

回した。

音楽は緩やかに流れる、向かう先には、統率者が立っている。

アクロはしなやかな動きで、踊りを完璧に踊っていた。シエンは慣れないダンスに、アクロの足を多々踏んでいたが、アクロに踏むたびに脅され、だんだんと踏む回数は減っていった。

踊りながら、統率者の方へ移動していく。

アクロがくると軽やかに回るたびに、やわらかな白髪は流れるように空を舞い、感嘆の声が上がった。

「……………」

音楽が流れ続ける、だんだんと、シエンがダンスのステップに慣れてきた頃、音楽は唐突に終わった。

「ブラボー！」

そう言ったのは、統率者だった。

「いやあ、可愛いワルツだったね、お嬢さん、舞踏会慣れしている様だけど、舞踏会は何回目かな？」

「……五回目ですわ、王……少しお話したいことがありますの。」

「

アクロは造花の様な笑みを浮かべ、ドレスの裾をつまんだ。

「レディ、飲み物をとって来ます」

シエンは礼儀正しく統率者に向けてお辞儀をし、アクロに向かって言った。アクロは小さくコクンと頷いた。

「そうか、五回目か、素晴らしいワルツだったよ、私の名前はオレガノだあ、以後よろしく。ところで、話したいことは何かな？」

「重い病気を患った時、臓器を入れ替えなくてはならない時があるでしょ？」

「ああ、あるねえ」

「それを、血縁者内では無く、事故にあって亡くなってしまったばかりの人の臓器でも、一致すれば使用してよいという風にして頂きたいんですが」

「ううーん、そうだねえ……じゃあ、君の臓器を代わりに使えば

？」

そう言うが早いか、オレガノは胸元から銃を取り出し、アクロの額に触れるか触れないかの位置に止めた。

「オレガノ様、知ってます？引き金を引くのに約0・48秒、弾に火がつくのに約0・02秒、弾丸が筒から飛び出すのに約0・5・  
・合わせて、一秒・・・・」

「それがどうしたのかな？お譲さん。」

「ボクの前での一秒は永遠と同じって言いたいんです」  
周りから甲高い悲鳴が上がった。

## 8 紅蓮龍

「そうかいそうかい、そんな事はどうでもいいのだけれど、待って居たんだよ、『紅蓮龍』、ふふっ、まさか子供だったとわね、全く分からなかったよ、それに、赤髪に赤目だって聞いてたしね、ふふふふっ」

オレガノは恐ろしい笑みを浮かべ、アクロの額に赤くなるほど、銃口を強く、押し付けた。

「痛っ！」

アクロの強気な視線に若干の苛立ちを感じたのか、銃口を捻<sup>ひね</sup>りながら強く押し付ける。

「ふふ、『紅蓮龍』なんてかつこいい名前だから、男の子だと思つてよ。それなりの、力はあるだろうね？じゃないと、ぜんっぜん楽しくないじゃないか、あとその、反抗的な態度はただ相手を怒らせるだけだよ？」

アクロはオレガノの、恐ろしい笑みに喉を引き攣<sup>つか</sup>らせた、オレガノに気付かれぬ様にこっそりと《血染ノ剣》を取り出し、勢いをつけて、オレガノの喉笛を貫いた。

掌に、皮膚を突き破る感触と、肉を掻き分ける感触が残る。

だが、オレガノは喉を貫かれたにも拘らず、アクロの額に銃口を押し付けたまま、笑い続けている。

「それだけかい『紅蓮龍』？」

まるで化け物の様に。

「くそがつ、シエンッ！」

アクロは眉間の皺を一層深くしながら、シエンの名を叫ぶように言った。

シエンはオレガノの頭上に居た。

シエンの両手には、『聖海ノ爪』が握りこまれている。

「戦争しようぜ？おっさん!!」

シエンは両腕を大きく広げ、オレガノの頭を爪で引き裂いた。血が飛び散り、アクロの白髪とドレスを鮮血で染上げる。

アクロの足元に首から上の無い、オレガノの骸が落ちていた。アクロは見下すような目つきで、オレガノの骸を、踵の高いパンプスで踏みつけた。

「ふははははははははははははははははっ……素晴らしい！素晴らしいぞ！なんて素晴らしい殺しだ！私のクローンの頭が木っ端微塵じゃないかつ！」

そう楽しそうに言ったのは、オレガノ。

殺したはずのオレガノ。

「・・・っ！なんで!？」 「どう言っことだよっ!」 アクロとシエンは、驚愕した。

足元の死体はオレガノのものはず。  
なのに。

「だから言っただろ？クローンだって！」

クローンとは、同一の起源を所有し、それに、均一な遺伝子情報を持つ、細胞、核酸、固体の集団のこと。つまり、まったく同じもの。偽者だけど、本物。

「ふふふつ、私はちゃんと本物だよ？ 嘘なんかつかないよ、嘘は嫌いだからね。」

「でも、貴方はボクを騙した、これは立派な嘘だ。」

「騙したんじゃない、勝手に騙されたんだ、私が本物ですってクロンが言ったのかい？言っていないはずだけどなあ．．．ふふつ、赤髪、赤目、ってのは、髪を血で赤く染めた君の事だったんだね」

「黙れ、酸素の無駄だ」

アクロとシェンはオレガノを睨み付けた。

「アクト・・・」

シェンがアクロに近づき、耳元で小さく囁くように言った。

「何さ」

「あいつの血の匂い、あの兵隊の匂いと似てる」

「兵隊？」

「あの紙で指切った、金髪の方」

シエンは言った、少し楽しそうに。

アクロは銃口を押し付けられ、赤く鬱血した額の丸い痕をさすった。鮮血に濡れたドレスを、動きやすい様に、切り裂き、兵隊のところへ駆け出した。

シエンはアクロを追った。

## 9 紅の血

もう、そこに居たのは兵士ではなかった、一国の王子、オレガノ本人。

「あれ？何で気がついちゃったのかな？おかしいなあ、あのクロンは完璧なはずなんだけど？」

「血の匂いですよ、」

「血は盲点だったかな、まあいいさ、君達の事を、殺すまでっ！」  
オレガノは、長い口笛を吹いた。

「ピーーーーー」。

すると、オレガノの後方から沢山の屈強な男達が現れた。

中には、手を4つあったり、足が無く這うように向かってくる者も居た。女性が一人混ざっている・・・ゼニアだ。

「・・・これも、クローンですか？」

アクロは顔を顰め、オレガノを睨み付けた。シェンはその光景を見て呆けている。

「ああ、そうだよ？失敗作も混ざってるけど、皆強い子達だし、それに皆、従順なんだよ、洗礼されてるしね。」

オレガノは楽しそうに言って、失敗作の頭に手をやり、優しく撫でた。失敗作は指の無い手足をぶら下げ、汚らしく涎をまき散らしながら笑った様にアクロには見えた。

「正真正銘の嘔吐きですね、この詐欺師<sup>ペテン</sup>がつ！」

「黙れ、小娘がつ！殺れ！！」

オレガノは突然激昂し、クローン達に命を下した。

「そんな、下等生物共に私が倒されると思うのなら、貴方の頭の中には脳味噌が無いんじゃないんですか？」

アクロはオレガノに激しい呟りをかけた。

オレガノはそれを、クローン達の攻撃で答えた。

アクロはそんなものにせずに突き進む。

アクロの顔をシェンが掃除するかのようになり、クローン達を切り刻んでいく。

青い鎌爪が赤に染まっていく、アクロの赤に。

「アクロ、オレガノだけを狙え！」

「分かっているよっ！」

アクロは脅威の跳躍で、オレガノの懐に降り立った。

アクロはオレガノの心臓に《血染ノ剣》を宛がった。

オレガノの顔から怒りのマスクが剥がれ、恐怖が張り付いた。

「どうしたんですか？ さっきは元気に喚いてたのに」

「っ……」

「殺されたくなければ、答えなさい……どうして、ボク等を殺そうとしたんですか？」

アクロの表情には、いつもの無機質なものはなかった、無情な無表情。冷え切った仮面。

「君達が無茶を言うから……」

「何が無茶だ……貴方のクローンでも使えば、幾らでもできるじゃないかっ！」

アクロは剣の切っ先を食い込ませた、オレガノの皮膚から血が滲む。

「ひっ、あっあっ、アルマン様が……」

「アルマン？……アルマン・キューブ・リナリアか？」

「そうです！ アルマン様がもし、紅蓮龍様を殺せば、千人の有能な兵とクローン技術の研究費用を出してくれると……」

「クソ親父が……いつか、あの腐れた脳味噌を野良犬にくれてやる……」

「ぐっ 紅蓮龍様……？」

「貴方は、アルマンに雇われたわけ？」

「はっはい！ だから私は何も悪くないはずなんですっ！」

「……ゼニアさんも混ざっていた様だけどなぜです？」

「本物の動物も人間もこの国にはおりません！」

「どうということ？」



「私が元居た国で、私はクローンの技術を開発して居りました。そこで、クローンだけで国を造ったのです・・・」

「そうですか、で、ゼニアさんも貴方の自由だと・・・クローンとは言え、心のあるものを踏みにじっているんですね？」

「クローンに心などありませんっ！」

「そうですか・・・」

アクロの瞳には呆れと怒りが渦を巻いていた。

「あっ・・・あっ！」

「おやすみなさい、良き悪夢を・・・。」

「いやだあああああああああ！！！」

オレガノの悲鳴が高らかにあがった。

アクロは本日二度目の血飛沫を浴び、より深い赤に染まった。

## 10 紅の夕焼け

アクロ達は逃げるように国を立ち去った。  
国内はオレガノの造ったクローン達だけ。

アクロ達の居場所などあるはずもなく。

アクロは帰りにいろんな店から甘味を強奪していた。

そのアクロは今、缶に詰められたスティックパイを頬張り続けている。

「アクロちゃん！太るから食べるの止めるですう？」

「運動したし、頭が疲れてるから、ブドウ糖を摂取してるんです」

「ああ言えば、こう言うですう」

「何か言いましたか？ベルガモットさん」

「ああもお！タメ口でいって言うてるです！感じ悪いですねえ、  
もお！」

ジャスミンは子供が、駄々をこねる様に言ったが、楽しそうだった。  
アクロはムスっとしたままパイを食べ続けている。

「なあアクロオ、メタボリックって知ってるか？」

シエンが茶化すように言った。

「黙れ、酸素の無駄だ！」

「ひでえ、つうか、それあのオレガノとか言うおっさんにも言った  
台詞だろうが！オレはあのおっさんと同列かよ！」

「それ以下だよ」

「以下かよ！」

「でも今回の活躍で屑から塵に格上げだよ」

「どっちが下か分かんねえよ！」

「ゴミの上は、ゴキリだよ？」

「それは屑より下だと思うぞー！」

シエンの叫びは、野太いエンジン音に掻き消された。  
オープンカーは紅い夕日に向かって走っていた。

E  
N  
D

## 10 紅の夕焼け（後書き）

終わったあゝ！！

一気に投稿つかりたww

私がまだ子供だった頃に書いたものなので、最後は雑に終わりました。（土下座

すみません。

誤字脱字あり次第コメに乗っけてくださいwwww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9315s/>

---

アクロ・キューブ

2011年5月5日15時17分発行